改修工事進む水俣港

しゅんせつ急ピッチ

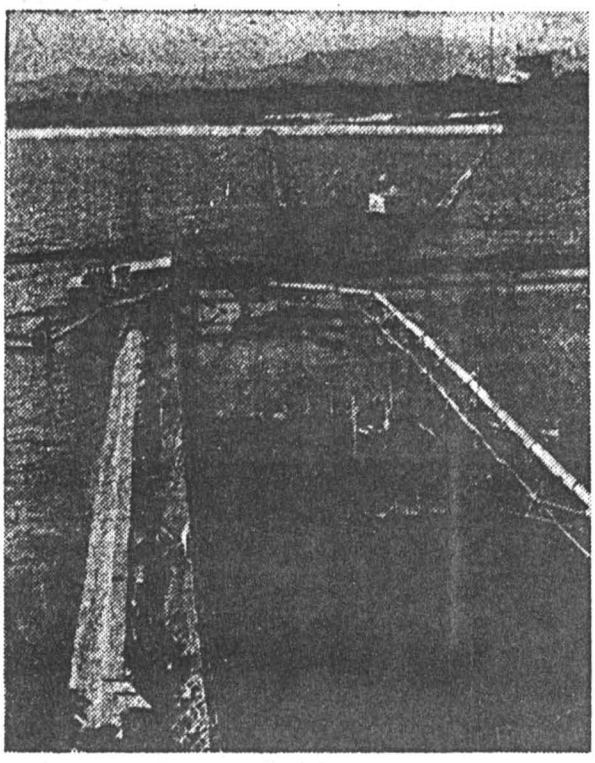
五月から大型船も接岸

水俣市民の長い間の念願だった水俣港の改修工事は、さる二月からようやく着手されたが、このほど海底の削岩が終わり泥土のしゅんせつ工事が急ピッチではじめられた。

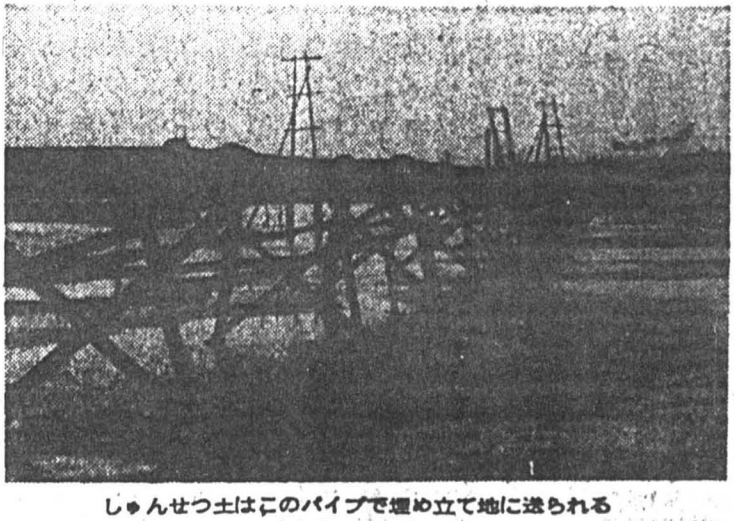
本年度分のしゅんせつ区域は、新岸壁沿いの長さ三百メートル、幅五十メートルの航路および泊地。先月十七日から活動をはじめた削岩船「相模丸」は先のとがった鉄柱を海底に打ち込み、先月末までに約七千立方メートルの岩石を砕いた。そのあとは、しゅんせつ船「長門丸」と「虎丸」が入港。長門丸は海底から新岸壁にそって埋め立て予定地までパイプをつなぎ、海底の泥を水といっしょに流し込んでいる。黒い"トベ"と呼ばれ、水俣病の原因となる有機水銀を含んでいたといわれるだけに、パイプからはき出される泥土は気味が悪いほど黒い。埋め立て地の周囲は高さ二メートルの堤防を築き、泥土が外へ流れ出さないように細心の注意がはらわれ、工事が進められている。

虎丸は岸壁に横付け、クラムセル（動力掘削機）で海底の泥土を掘り上げ、泥土運搬船で埋め立て地まで運んでいる。日がくれても照明をつけて工事を進めるほどの突貫作業。四月末までには七万立方メートルのしゅんせつが終わり、水深は六・五メートルになるので、新岸壁には五千トン級の大型船二隻が接岸可能となる。

本年度の工費は三千八百万円。なお新年度からは総工費三億二千万円で新五カ年計画の改修にとりかかる。百メートルの新岸壁はさらに二百メートル延長し、泊地、航路など十二万八千八百立方メートル（四十二万七千立方メートル）のしゅんせつ工事が行なわれる予定で、完成すれば五千トン級二隻が接岸できるようになる。



しゅんせつ工事を急ぐ水俣港



しゅんせつ土はこのパイプで埋め立て地に送られる